

トラッジ と ジッピー

ジッピーは、少し いらいらしてきました。今日は、森に カーニバルが
来ているのです。先週から ずっと、その カーニバルに 行くのを
楽しみに していました。それなのに、お父さんも お母さんも、弟たちも
妹たちも、出かける 支度が とっても おそいのです。やつとの ことで
みんな 道に 出て、今度は ジッピーの 友だち トラッジを 待っています。
ですが、一体 トラッジは どこに いるのでしょうか？

「トラッジ！　トラッジ！　どこに いるんだい？　朝早くから 行って
全部の 乗り物に 乗れるように、もう 準備が できるはずだよ。早く
行こうよー！」



すると、スイレンの葉が
ガサガサっと動き、水の
なかからトラッジが
ひょっこりと顔を
だしました。

「やあ、ジッピー！ 万事
じゅんちょう 順調、ぼくはここだよ！」

「エヘン。」

「しまった。ごめんよ、
ジッピー。朝の一泳ぎを
してたら、すっごく気持ち
よくて、つい時間のことを
わすれちゃったよ。」

「ううん、いいんだよ。
だれでもうっかりすることはあるからね。
それよりも、早く行こう！

みんな、待ってるよ。
お父さんとお母さんが、
出かける前にみんなに
話したいことが
あるんだって。」



「ジッピー、君って、ホントにいい友だちだよ。
ねえ、カーニバルまで、ぼくの背中に乗ってかない？」
「わあ、ありがとう、トラッジ！」
「お安いご用さ。」

カメの ト ラッジには 固い こうらが あるので、
ジッピーを の 乗せて ある 歩けるのです。ト ラッジの
こうらは、 黄色と 緑色の まだらでした。友だちの
ジッピーは 野ネズミで、 灰色です。毛は 短く、
ちっちゃん かわいい 耳が ついています。しっぽは
細長くて、 針金のようでした。ジッピーは、
ト ラッジの 池の そばに 住んでいて、二ひきは
毎日 いつしょに 遊んでいました。

「さあ、行こう。支度が できたって、みんなに 知らせてくるね。」 ジッピーが ビューンと
道に 向かって かけ上がって 行くと、ト ラッジは その後を のっそと のぼり登って 行きました。
みんな、わくわくです。行く時は みんなで いつしょに 行き、カーニバルに 着いたら、
ト ラッジと ジッピーは しばらくの間、二ひきだけで 行動して いいことに なっていました。





やっと ト ラッジが 道に たどり着くと、
父さんネズミが 話し始めました。
「子どもたち、よく お聞き。今日は、
森も カーニバル会場も、動物たちで
いっぱいだ。乗り物や 見世物は
そこら中で やっているから、混雑の
なか 中で すぐに はぐれてしまうかも
しない。だから、もし はぐれたら、
とにかく 4時に 岩の 広場で ほかの
みんなと 会うことに しよう。

ひとりひとり 一人一人のために、森と カーニバル
会場の 地図を かいておいたからね。
それと、おまえたちの 名前と 住所を
書いた 紙も 母さんが 用意してくれた
から、万が一、まい子になつて
だれかに 助けを お願ひする時には
つか 使いなさい。」

父さんネズミは いつも、まい子に
なつたら どうするか、子どもたちが
わかっているか どうかを 確認します。
「ああ、最後に もう一つ。動物たちは
みんな、カーニバルの 間は マナーを
きちんと 守り、ほかの 動物に
めいわくを かけないと 約束している。」

「だがな、気を つけるんだぞ。

じいちゃんネズミが いつも
言っているだろう? 『カーニバル
だろと 何だろと、しょせん、
ネコは ネコ』だって ことをな。」

「うわ~!」

「あなた、 子どもたちが こわがるわ。
ネコの 話は、もう 十分よ。」

「それも そうだな、母さん。では
みんな、行くと しよう。楽しんで
おいで!」

「わーい!」

「トラッジと ジッピーは、いつも
いつしょに いて、気を つけるんだぞ。
わしらは 先に 歩いて行くが、あまり
おくれんようにな。では、4 時には
岩の 広場で 会おう。」

「さあ、乗った、ジッピー! 出発だ!」

ジッピーが こうらに すわると、
トラッジは のっそりと 歩き始め
ました。自分で 走っている つもり
なのですが、トラッジには 全速力でも、
ネズミの ジッピーには のろのろ
運転です。



「ねえ、トラッジ。もうちょっと
はやくある歩けない？ カーニバルが
まき待ち切れないよ。」

たし 「確かに、ぼくは 君と 比べたら
おそいよ、ジッピー。だけど、少なくとも
ぼくは 安全運転さ！ そのうち
つくから、心配ないよ。」

「そのうちだって？ トラッジって、
のんきだなあ。ぼくの 家族は、もう
み見えないよ。」

ジッピーは、トラッジが 大好きです。
だいす
ただ、友だちが カメだと、それは
それは、しんぼう強くないと
いけません。ジッピーは あお向けに
なって、白い ふわふわした 雲が
ゆっくりと 動いていくのを ながめて
いました。やがて ジッピーは
うとうとし始め、ねむってしまいました。
おお
大きくて おいしそうな チーズケーキの
ゆめ
夢を見ながら…。



「わーい！」

かんせい おんがく
歓声や 音楽なんかの 音で、ジッピーは 自が
さき 覚めました。カーニバルに 着いたのです。

「着いたよ、ジッピー！」



「うわあ、わくわくするなあ！」

の もの の
乗り物に 全部 乗って、
おいしいものを 全部 食べて
まわ まき
回るのが 待ち切れないよ！」

「ポップコーン、ポップコーン！
ポップコーンは いかがかね？」

「ひゃー、ここって、すごく
でっかいねえ！ 全部 回るのに、
なんにち
何日もかかるよ！」

「それなら、早く 行かなきゃ！
トラッジ、こっちこっち！」

ま
「待ってよ、ジッピー！
速すぎて、ついていけないよ。」

わ
「分かった、分かった。ねえ、
あそこに おっきな 観覧車が
ある！ あれに の
乗らない？」

おもしろ
「うん、面白そうだね。」
に たの
そこで 二ひきは、楽しそうな
おんがく き
音楽が 聞こえてくる、大きな
かんらんしゃ ほう い
観覧車の方に 行きました。



に
二ひきが 乗ると、観覧車は どんどん、どんどん、
うえ あ い かんらんしゃ
上に 上がって行きました。森の木々よりも 高く
あ い もり き ぎ たか
上がって行きました。はるか 遠くの 景色まで よく
み い とお け しき
見えます。下を 見ると、みんな、豆つぶのよう
ちい み まめ
小さく 見えます。

「わあ！ 下を見て、ジッピー！ 空を 飛んで
いる とり
鳥たちには きっと、ぼくたちが あんなふうに
み 見えるんだね。」

「そうだね！ 見て、あっちの 広場。真ん中に
おお いわ ひろば ま なか
大きな 岩があるよ。4時に みんなと 会う 岩の
ひろば いわ あ
広場だね。」

ひ なか よ に
その日、仲良し二ひきは、遊んで 遊んで 遊び
おお あそ あそ あそ
まくりました。メリーゴーランドにも 乗りました。
たの
「ホントに 楽しいね。」

おお
バンパー ボートにも 乗ったし、大きな
まわ
ティーカップにも 乗って、ぐるぐる 回ったし…。
てじなし
手品師トムキャットの マジックショードって 見ました。
み

「ジッピー、ネコについて お父さんが 言ってたこと、
おぼ
覚えてる？ 十分 はなれてないとね。」

うし ほう み
「そうだね、トラッジ。後ろの方で 見ようね。」
み
「見て、ジッピー。あっちに カワウソが いる。
ピエロの かっこを しているよ。」

「カワウソだって？ すっごい おかしいね！」

「みなさん、乗ってください。」

「最高に こわい の もの 乗り物、こうらから

飛び出しそうなくらい こわいよ！ カメ限定。」

「ポップコーン、ポップコーン！ ポップコーンは
いかがかね？」

「しぶりたての ジュースだよ。」

「キャラメルは いかがかね？ キャラメル、
キャラメルだよ。」

「うわあ、おなか へったなあ。あそこの
スタンドへ 行って、何か 買おうよ。」

「うん、行こう、行こう！ ぼくも おなか ペコペコ。」

「さあ、ぼうやたちは 何が 食べたいかね？」

「え～っと、ぼくは、あの おいしそうな チーズ
ケーキが いいな。それと、ポップコーンを ください。」

「トラッジは 何に する？」

「う～んとね。そうだ、虫バーガースペシャルに
するよ。」

「すぐに できますよ。ほかには？」

「えっと、海草フライを つけてください。」

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます！」

「う～ん、この チーズケーキ、おいしい～！」

「この 虫バーガー、食べてみる？ すごく
おいしいよ。」



二ひきは、それは それは 楽しい 時を
す過ごしました。そして、あつという間に
1日が 過ぎてしましました。日は
かたむき、もう 岩の 広場に 向かう
時間です。ちょうど その時、もう一つ、
まだ 見ていない アトラクションが
あるのに 気が つきました。

ぐちゃぐちゃ めいろ 迷路

「ねえ、トラッジ。森の そばに 看板があるよ。
『ぐちゃぐちゃ 迷路』だって。まだ 入ってないよ。」
「あ～、でも、何か ちょっと 暗くて
氣味悪そうだなあ。それに、もう 広場に 行かないと。
ぼくは、君よりも 歩くのが おそいしね。」
「ぼくの 勘だと、広場は この うっそうとした
森の ちょうど 向こう側だと 思うんだけど。
ぐちゃぐちゃ 迷路を 通れば、近道ができるよ。」

「そうかなあ。もし 近道が なくて、まい子に
なつちゃったら どうするの？ 君の お父さんが
くれた 地図を 見てみようよ。」

「分かったよ。え~っと。確か、この辺に 入れてた
はずなんだけど。あれ、ないなあ！ きっと、乗り物に
乗ってた 時に 落としちゃったんだよ。まあ、いいや。
地図なんて、なくても だいじょうぶさ。ぼくは
ネズミだからね。暗くても、道は 分かるんだ。
トラッジ、ちょっとは 冒険してみようよ！」

「冒険かあ。ぼくも、乗り物に 乗ってた 時に
地図を 落としてきちゃったみたいだよ。」

ジッピーは、何とか トラッジを なだめすかし、
とうとう トラッジも、ぐちゃぐちゃ迷路に入ることに
しました。

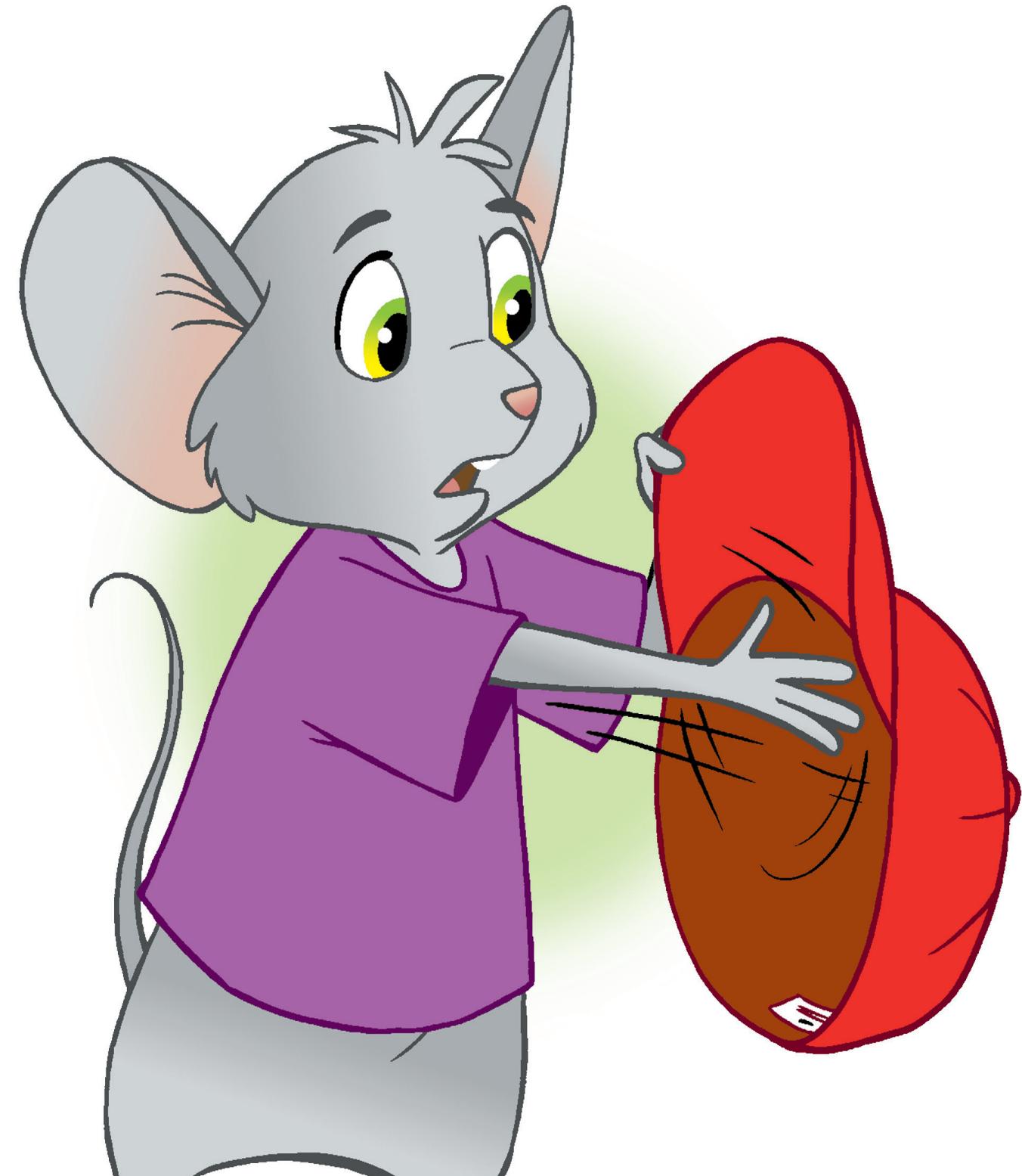
「う~ん、分かったよ。君が そこまで 言うならね。」
うつそうとした しげみの 中に入って行くと、
ジッピーが 思っていたよりも、道は ずっと ごちゃごちゃ
していました。

「ねえ、ジッピー。ぼくたち、今 どこに いるんだろう?
どっちに行ったら いいんだろう？」

「え~っと、たぶん こっちだよ。」

「ああ。」

「いや、そっちかも しない。それとも、こっちかな。
いや、あっちだ！」





二ひきは、後ろを ふり返りました。
どの道を行けば、森の 入口まで
もどれるのでしょうか? 木や
しげみが うっそうと していて、
空も ほとんど 見えません。少し
先の方だって、見えないです。

「どうしよう! どうしたら
ここから 出られるだろう、ジッピー?」

「ああ、分かってる、分かってる。
こっちに 行こう。早く 早く。後ろかな、
左かな、いや、右かも。いや、真っ直ぐ
行ってみよう。早く、こっちだよ…」

ジッピーは、こっちに ちよこまか、
あっちに ちよこまか、そっちに
ちよこまか、こっちを のぞき、あっちを
のぞきして、見覚えのある 道は
ないかと、せわしなく かけ回ります。

かわいそうな トラッジ。道を 曲がって
坂を 上ったと 思ったら また 降りて、
歩いて 歩いて 歩きづめで、もう
へとへとです。それでも、道は まだ
わかりません。

「ねえ、ジッピー。ぼくたち、
まい子になっちゃったんだよ!
やっぱり、来なけりや よかったんだ。」

「最初は ちょっと 面白かったけど、だんだん こわくなっちゃった。もう おそいし、うちに 帰りたいよ。」

「ぼくもだよ、トラッジ。」

「どうしよう？」

「わ、分からないよ、トラッジ。君の 話に 耳を かさなくて、ごめんね。君の 言う通りだったよ。こんなに おそいのに、ぐちゃぐちゃ迷路になんか、入るべきじゃ なかつたんだ。だれも いないから、きける 人も いないしね。」

「そうだ、ジッピー。助けてくれる 人が いるよ。」

「だ、だれだい？」

「あのね、母さんが いつも 言ってたんだ。何か こまつたことが あれば、イエス様に 話しなさいって。」

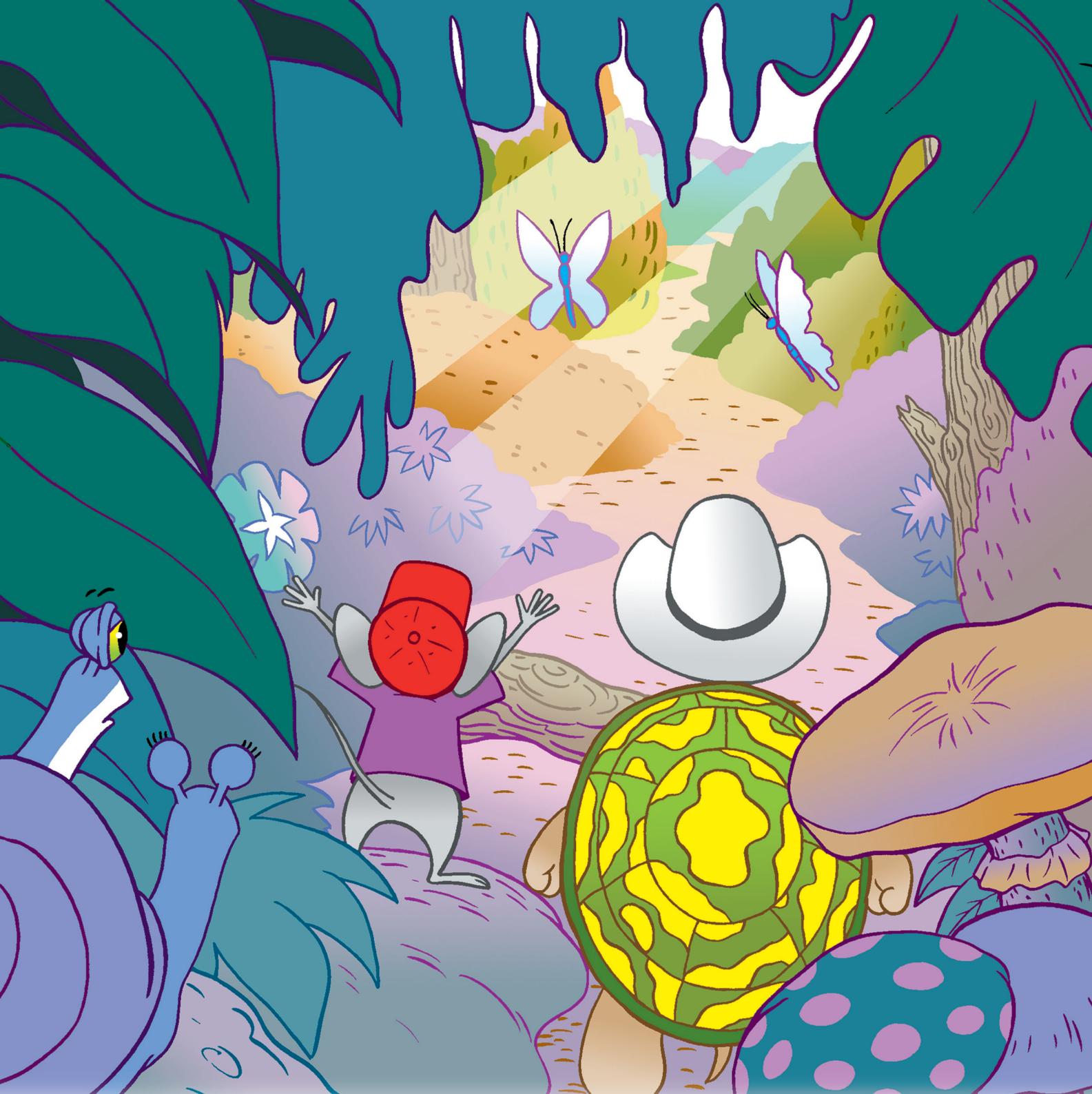
「それは いい 考えだね。イエス様なら、ここから 出る道だって、知ってるしね。祈って、助けてもらおうよ。」

「うん、祈ろう。」

「イエス様、ぼくたち、まい子に なつてしましました。どうか、助けてください。みんなと 会う 場所への 道がみ見つかりますように。」

二人は しばらくの間、静かにして 頭を たれていました。





きゅう 急に、ジッピーが 顔を 上げました。

とても うれしそうです。

「あれ、聞こえる?」

「何だい、ジッピー?」

「音楽だよ。あっちの 方から、

観覧車から 聞こえてた 音楽が

聞こえてくる。観覧車は、岩の

広場の 近くだったよね!」

「そう 言えば、そうだね。」

「だから、音楽の 聞こえる 方へ

行けば、観覧車が 見えてきて、

広場も すぐに 見つかるよ。」

「名案だね。じゃ 行こう、

ジッピー!」
二人は 所々で 立ち止まつては
耳を すまし、正しい 方へ 向かう
道を たどっていきました…。

「こっちだ!」

…そして とうとう、二ひきは、
よく ふみならされた 普通の 道に
で出ることが できたのです。

「木の 上を 見て! 観覧車の
てっぺんが 見えるよ!」

「ホントだ!」

ジッピーと トラッジは、ほっと しました。

「行こう！」

ジッピーは うれしくて、思わず 観覧車の 方に
走り出しました。トラッジでさえ、カメとは 思えない
ほどの 速さで 走ったのです。そして とうとう、
二ひきは 観覧車の 下に 着きました。

「見て、トラッジ。広場に 向かう 道だよ。
あそこ！ イエス様が、道を 見つけるのを 助けて
くださったんだね。」

まもなく、二ひきは 野ネズミ一家と 無事、
落ち合うことが できました。

「あなたたちのことが 心配になりかけて
いたのよ！ ねえ、お父さん？」

「全くだ。ちょうど、キツツキパトロールに
助けを お願いしようとしていた ところだよ。」
「無事に ここまで 来れて、本当に よかったわ。
神様のおかげね。」

「さてと、みんな、家に 帰る 支度は いいかい？」
「はーい！」





その夜、仲良しの二ひきが空を見上げると、星がキラキラ
かがやいていました。二ひきは今日の冒険を思い出していました。

「万事うまくいって、本当によかったですよ、ジッピー。」

「ホントにね！一晩中ぐちゃぐちゃ迷路を歩き回らずに
済んで、すごくうれしいよ。」

「ねえ、トラッジ。ぼくたちって、いい仲間だよね。君は
ゆっくりだから、時々じれったくなっちゃうけど、友だちで
うれしいよ。ぼくの友だちでいてくれて、ありがとう！」

「ぼくも、ちょうどおんなじことを考えてたんだ、ジッピー。
時々君に追い付けなくても、ぼくは気にならないよ。
何てたって、君はぼくの最高の友だちだもの。いつしょにいて、
いつもすごく楽しいよ。」

「それに、ぼくたちには、イエス様っていう、最高の友だちも
いるしね！」

「ホント、ホント、全くだよ、ジッピー。」
そして二ひきは、キラキラとかがやく星空の下で、
すやすやとねむりについたのでした。

文:ディレック&ミッシェル・ブルックス

絵:ヒューゴ・ウェストファルとアナ・フィールズ

Copyright © 2000年、オーロラ・プロダクションズAG、使用許諾取得済

“Trudge & Zippy”--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/level-1/2012/9/5/slideshow-trudge-and-zippy.html>